

かいたく

教会のない地域に教会を 刈り入れ場に働き人を



2023年9月23日・24日 国内宣教カンファレンス

私たちが信じて救われたのは福音によりです。「福音」と言った場合、イエスが死んでよみがえられたこと（Iコリント一五章三〜四節）と理解します。しかし、イエスが宣べ伝えたのは福音ではなくて「御国の福音」です（マタイ四章二三節）。「御国」は「天の御国、神の国」とも表現されていますが、いずれも王国を意味することは使われています。いかなれば「キリストの王国の福音」です。そうすると、パウロがIコリント一五章で「あなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせます」と言って、伝えた内容が良く理解できます。その福音の中心は、キリストが死んでよみがえられたように、キリストに属している人たちもよみがえり、終わりが来て、キリストが王として王国を治めるといふものです（一五章二〇節〜二五節）。この地上においてキリストの王国を打ち建てることは、旧約の多くの預言者たちも預言して来たことです（ミカ四章六〜八節など）。福音は神の力なのですが、過去の恵みの出来事で終わるものではありません。福音によって与えられた永遠のいのちを、将来キリストと共に実際に生かすことになるというものです。キリストとともに死に、キリストとともに葬られた私たちは、キリストが死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいのちに歩むのです（ローマ六章四節）。ただ、その新しい歩みの醍醐味はこれからです。地上におけるキリストの王国を待望し続けることで、教会や個人が直面している様々な問題に対して新しい解決を得るでしょう。これに待ち望むことがままならないなら、その先の「新しい天と新しい地」はまず望めないでしょう。どれほど栄光に富んだものが私たちに用意されているかということです。

JBBF国内宣教委員会委員長・井口拓志

かいたく 2023年12月発行 第90号 発行元:JBBF国内宣教委員会 長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉4696-27 編集責任:井口拓志 デザイン:元田健次

2024年1月25日(木)・26日(金)

教役者フェローシップ 2024のご案内



テーマ:「御言葉の励まし、交わりの励まし」

説教者: 榎本 昌博 師(掛川聖書バプテスト教会)

日 程: 2024年1月25日(木)、26日(金)

場 所: 静岡県立朝霧野外活動センター(静岡県富士宮市根原1)

電話:0544-52-0322(代表)

対 象: 教役者およびそのご家族/定員60名

費 用: ①宿泊費全額補助

②食費(夕食、朝食、昼食):大人2,000円、未就学児1,500円

※小学生以上は大人料金です

※アレルギーのある方はメールリストにお送りしている「アレルギー対応食申込書」に記入し、施設の「あさざり食堂」と直接ご対応ください。(電話:0544-52-2187/ファックス:0544-52-2188) 申込の際の団体名「JBBF」です。

③交通費 申請される方に補助します(上限15,000円)

先着60名 ※他団体も施設を利用するため



以下のいずれかの方法で申し込んでください ※締切 12月25日(月)

申込方法① メールリストにお送りしている申込書に記入して返信

申込方法② 以下のフォームからオンラインで申込

<https://forms.gle/p4MefXKStAlkUdUi8>



宣教委員会からのお知らせ

コロナ支援献金の受付は終了いたしました

2020年に始まったコロナ問題も一段落したように思われます。この間、諸教会の皆様から、多くの支援献金が寄せられました。集まった献金は「新型コロナウイルス対応支援基金」としてプールし、神学生の援助や教役者ご家族の支援、諸教会のウイルス対策、ライブ配信導入のための費用などに充てさせていただきました。皆様の尊い献げものに心より感謝申し上げます。

現在、コロナ基金には約53万円の残金がありますが、当初、国内宣教委員会の一般会計より50万円を基金に繰り入れていましたので、残金の全額を一般会計に戻し、今後の必要に備えさせていただきたいと思っております。ご了承ください。

献金振込先(郵便振込)
00140・2・654375
JBBF国内宣教委員会

この福音のために

福音のために心を一つにして
ともに戦おう

清水聖書バプテスト教会 浜田 献



兄弟に、「この世にありながらも、世の価値観や世の方法で生きるのではなく、天に属する民としての生活を営んで行くには「戦い」「反対者」「苦しみ」「苦闘」という言葉が出てきます。私たちが福音にふさわしく生きようとする時、そこに戦いがあり、そこには苦しみもあるのです。パウロは、主の弟子たちが経験する苦しみは主が与えてくださった信仰と同様「恵み」であると語っています。『あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じることでなく、キリストのために苦しむことでもあ

福音のための戦いがある

「かつての苦しみ」は、パウロがピリピに来たばかりの頃の獄舎での経験であると考えられます（使徒一六章）。獄舎で迎えた眠れない夜も、パウロとシラスは主に祈り、賛美をささげていました。その声に囚人たちは聞き入っていました（使徒一六章二五節）。その後、大地震が起こり、大騒動の中で看守とその家族全員が救いに導かれることになりました。この獄舎での経験をを通して、信仰に生きるといふことがいかに特別な人生であるのかを証しされました。苦難の中で、パウロとシラスの信仰は輝き、福音の影響が示されたのです。



「かつての苦しみ」は、パウロがピリピに来たばかりの頃の獄舎での経験であると考えられます（使徒一六章）。獄舎で迎えた眠れない夜も、パウロとシラスは主に祈り、賛美をささげていました。その声に囚人たちは聞き入っていました（使徒一六章二五節）。その後、大地震が起こり、大騒動の中で看守とその家族全員が救いに導かれることになりました。この獄舎での経験をを通して、信仰に生きるといふことがいかに特別な人生であるのかを証しされました。苦難の中で、パウロとシラスの信仰は輝き、福音の影響が示されたのです。

「かつての苦しみ」は、パウロがピリピに来たばかりの頃の獄舎での経験であると考えられます（使徒一六章）。獄舎で迎えた眠れない夜も、パウロとシラスは主に祈り、賛美をささげていました。その声に囚人たちは聞き入っていました（使徒一六章二五節）。その後、大地震が起こり、大騒動の中で看守とその家族全員が救いに導かれることになりました。この獄舎での経験をを通して、信仰に生きるといふことがいかに特別な人生であるのかを証しされました。苦難の中で、パウロとシラスの信仰は輝き、福音の影響が示されたのです。



「かつての苦しみ」は、パウロがピリピに来たばかりの頃の獄舎での経験であると考えられます（使徒一六章）。獄舎で迎えた眠れない夜も、パウロとシラスは主に祈り、賛美をささげていました。その声に囚人たちは聞き入っていました（使徒一六章二五節）。その後、大地震が起こり、大騒動の中で看守とその家族全員が救いに導かれることになりました。この獄舎での経験をを通して、信仰に生きるといふことがいかに特別な人生であるのかを証しされました。苦難の中で、パウロとシラスの信仰は輝き、福音の影響が示されたのです。

今年のカンファレンスも昨年同様「この福音のために」というテーマが掲げられました。サブテーマはピリピ書一章の御言葉ですから、ピリピ書一章を中心に主の御心に思いを巡らしていきたいと思えます。『ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、離れていくにしても、あなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにして堅く立ち、福音の信仰のために心を一つにしてともに戦っていて…』（ピリピ一章二七節）。

また福音は、私たちが復活の主とともに生きる人生へと導くメッセージです。かつて弟子たちに現れ、パウロに現れ、くださった復活の主は、この私にも現れて、この私とともに歩んでくださるお方でもあります。その恵みも含めて福音なのです。ですから、1コリント一五章はパウロ自身の証へと展開していきます。

『そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました』（八節）。「この私にも現れ、私の人生を変えてくださった」。そのことも含めて福音であるとしたら、福音にふさわしい生活とはどんな生き方でしょうか？

【福音に相応しく】
まず『ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい』（二七節）とありますが、「福音にふさわしい生活」とはどのような生活でしょうか？「福音にふさわしい生活」を考えるために、第一コリント一五章を通して「福音の内容」を確認するところから始めたいと思います。



【生活する】
ピリピ一章二七節の「生活しなさい」と訳されている動詞には「市民として生活しなさい」という意味が含まれていいます。同じ言葉の名詞形がピリピ三章二〇節では「国籍」と訳されています。つまり「生活しなさい」という言葉の中に「国籍・市民権を持つ者として生活しなさい」という意味が含まれているのです。ローマの植民都市であるピリピの人々にとっては、具体的な意味を含む言葉でした。ピリピは、マケドニアにいなながらもさながらローマにいるかのように生活することのできる「小ローマ」でした。パウロは、このような背景を持つピリピの

福音のためにともに戦う仲間がいる

最後に確認したいことは「福音のための戦い」は「一人で戦う戦いではなく、ともに戦う戦いである」ということです。ピリピ一章二七〜三〇節には福音のために霊を一つに堅く立ち、心を一つにともに戦うキリスト者たちの姿が描かれています。

パウロとともに戦う教会の姿は、既にピリピ教会の中で形となっていました。「あなたがたが最初の日から今日まで、福音を伝えることにともに携わってきたことを感謝しています」（五節）。ピリピ教会は長きにわたるパウロの戦友でした。ピリピ教会のパウロに対するサポートの



一つは、具体的な捧げ物でした（四章一四〜一六節）。ピリピから送られてくる捧げ物によって、パウロの生活と働きはどんなに助けられてきたことでしょう。パウロを支える働きは「最初の日から今日まで」継続されてきたと証しされています（※四章一〇節によると、一時的には途絶えていた期間があったこともわかりますが、ピリピ教会は再び得た機会も大切にしました）。「最初の日からピリピ一章まで」という意味で、その間およそ10年です。

ピリピ教会は紫布の商人リディアの救いから始まりました。リディアは、すぐに自分の家を解放し、宣教の拠点を提供しました。そこにピリピ教会のささげる信仰の原点がありました。その働きが今もなされているのはなぜでしょうか？その思いが主の与えてくださった思いであり、その働きが主の始めてくださった働きだったからです。「あなたがたのうちの良い働きを始められた方はキリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は強く信じているのです」（六節）。

パウロはピリピ教会の創立に携わった人物でしたが、その働きを始めたのも、完成させてくださるのも主ご自身であると語っています。ピリピ教会草創期の記録を読む時にも、一切の初めに主のご計画と働きがあ



ったことがわかります。教会を建て成長させてくださるのは主です。一人一人の心に志を与えてくださるのも与え続けてくださるのも主です。「良き働きを始めてくださったお方が、これからもその働きを導き、完成させてくださる」とパウロは励まし「まずまず一致をもって、この福音のためにともに戦ってください」とチャレンジを与えているのです。それこそが「福音にふさわしく生きる」ことだからです。一人ではできない戦いです。この福音のために、ともに祈り、そこにある喜びも困難もともに分かち合ってくれる仲間が必要です。

豊かな福音を、その豊かさに相応しく証しするために、主は一人一人に、福音のために生きる特別な人生を用意してくださっています。一人一人が、福音のために人生を明け渡し、一つとなつてともに立ち上がる時、今も福音はインパクトをもって伝わっていくことでしょう。今日を「この福音のために」とともに立ち上がる日にしようではありませんか。



国内宣教カンファレンス参加者証し

東京聖書浸礼教会

森本 祈

今回は国内宣教カンファレンスに参加できたことを覚えて、主に感謝いたします。私は去年の夏まで中東のヨルダンでの生活を約三年していました。福音を自由に語れない国での生活は、とても苦痛であったのを今でもよく覚えていています。日本に戻らなければならぬ状況になり、去年の7月に戻ってきました。その後、大学院での学びを考えていましたが、同時期に主が献身



へと導き、現在イギリスBBCの神学をオンラインで学んでいます。今までは献身の思いをずっと持ちながら生活をしてきました。それは今回のカンファレンスのタイトルでもあった「福音」により自らが救われ、自身がこの福音を携える者としての使命があることを認識していたからです。ローマー10章一四節にあるように、多くの人がまだ福音を聞いたこともないなかで、自分にすべきことは何だろうかと常に考えて生きてきました。それは私が福音を受け入れた者として、すべき使命であると同時に、自分がこんな素晴らしいイエス・キリストの良き知らせを伝えずにはいられないからです(詩篇一二六篇五く六節)。一人の魂が救われたときに、どれほどの喜びが私たちにあるのでしょうか？また、どれほど主が喜ばれるでしょうか？一人が悔い改めたときの喜びは計り知れないということをお聞きし、海外での働きを通して主が私に語り、教えてくれたからこそ、私は福音を語る者としての働きをしたいと思っています。カンファレンス中も、福音のことを考えると本当にワクワクするような気分になりました。説教を聞いていても、本当にこの福音を危険にさらされてまでも宣べ伝えるパウロの姿を通して、



私が他のものに心を捕らわれるのではなく、第二テモテ一章一〜一二節にあるように、主の再臨の時が来るまでこの福音を責任をもって宣べ伝える使命があることを確信しました。私は8年間という長い月日を経て、やっと献身の決心をすることができました。今、私の集う東京聖書浸礼教会には牧師はいません。大きな試練も教会にあり、一時期は本当にどうなるかわからない希望が無い時期もありました。しかし、主が大きな試練のなかでも守って下さいました。カンファレンスに参加した牧師先生方との分かち合いの時に、ご自身の教会で起きたことを話してくれた先生方もおりました。



本当に教会というのは私たち人間と同じで、生きている以上、色々なことが起こります。また、色々なことが起きるなかで、今回のテーマのように「どのように福音にふさわしく生活できるのか」というのを考えさせられた時間であり、励ましを受けました。また、霊的な闘いが福音のために生きる時にあるのも、教会の試練を通して、よく共感できました。この霊的闘いは決して簡単なものではなく、時には傷も負います。しかし、時が良くとも悪くとも、福音をこれからも宣べ伝える者としての働きをしていきたいと心から決心できたカンファレンスでした。このような素晴らしいひと時を与えて下さいました主に感謝いたします。

船橋聖書バプテスト教会 柏伝道所 後藤 佳美

「あなたがたの間で良い働きを始めた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると私は確信しています。」ピリピ一章六節。国内宣教カンファレンスに参加させていただき、心から感謝します。

昨年春に転会し、船橋聖書バプテスト教会柏伝道所教会員となりました。最寄り駅から伝道所まで15分ほど歩くなか、公園や住宅地に若いご家族、子どもたちを見かけ、「この方々のもとへ福音を届けたい」と祈り、教会生活を送っています。



今年の初夏、献身の召しのみことばを与えられました。「神様に私自身をお捧げします。この者をお導きください」と祈る毎日を送っていました。8月、機関紙かいたくの最後のページに「国内宣教カンファレンス」開催のお知らせを目にし、お導きを祈り、参加いたしました。

生まれて初めての軽井沢。懐かしい白樺の木(北海道出身です)をはじめ自然あふれる中に建つ神学校に感動しこの環境の中に身をおける幸いを感謝しました。

開会礼拝から始まり、二日間に渡る集会では、浜田献先生よりピリピ人への手紙、テモテへの手紙から、メッセージをいただき、語られることばの一言一言に心が奮えました。

また、牧会されておられる先生方、神学生のお証しを伺い、神様が確かに



働かれておられること、祝福が与えられることを確信し、感謝でした。ゆったりとした時間のなか、分かち合いの時間、青年の方々々々のお交わりの時間をいただき、お恵みがシャワーのように一気に心に降り注ぎ、感動と感謝に溢れた二日間を過ごさせていただきました。青年方のまっすぐに神様を見上げておられる姿を見て、自分の若き日を思い巡らしました。私はなんて人生を無駄に生きてしまったのだろうと。しかし、ここに至らしめてくださるまで、鈍き器を愛と忍耐の限りを尽くして支えお導き下さり、今もそして未来においても主がともにいて働いてくださること、祝福を約束してくださることを確信して軽井沢後にしました。今、私もこの若き兄弟とともに、福音のために生き、これから先の歩みを主に委ね期待して、目の前のことを不平を言わず、疑わずに行い、神様を喜びお仕えしようと心新たにされる毎日を送っています。感謝！



国内宣教カンファレンスの恵みを感じ謝します。

今年の青年キャンプの時に、主からの呼びかけに応えて、福音宣教のために生涯を主におささげするという決心を導かれたのですが、そこから先、備えをしている期間にどのように進めば良いのか不透明のなかにありました。また、しばらくの間、心のうちに平安がなく、そのギャップに苦しむ時もありました。主からの召しを受け取った者が平安のうちに備えの期間を過ごすことができないことが、自分としてはう



まく受け止め切れませんでした。そこから逃げるように、他人の問題に目を向けていました。その問題は、私自身の問題ではないはずなのに、必要以上に悩み込み、苛立ちを覚えるほどとなっていました。多分、自分の問題に目を向けるより、その問題に目を向けていたほうが楽だったからかもしれません。いつかは、この問題から少し離れて、自分を見つめ直す時が必要であるとは感じていました。

カンファレンスでは、ピリピ一章二七節より、福音にふさわしい生活は律法主義的ではなく、喜びと感謝で溢れた生活であると語られました。その時私は、その人の問題を自分の視点を通じた律法ばかりから見えてしまい、相手をさばっている状態に近かったと気がつきました。このように語られ、私の今の状態を示されました。その後、教

会での小グループの学びの時に、神様に問われているのは相手ではなく、自分のその問題に対する態度であるので相手のことは主に委ねる、と教えられました。こうして、委ねることができると恵みに感謝し、祈り続けていきたいです。

次に、この戦いは一人での戦いではないと語られました。ピリピの人々はリディアの救いをはじめとして10年、パウロの働きを祈り、具体的な献げものをもって支え続けていました。支える思いは最初の日から終わりの日まで主が与えてくださり、変わりなくありました。そこから、すべての働きの最初に主がおられ、教会の働きはいつも主から始まると語られました。主が宣教の思い、行く者、全てをもって支える者を常に起こし続けていくと支えることを教えられました。そして福音の働きは牧師だけを最前線に立たせないよう、ともに戦っていくことの必要があると知り、私もともに戦っていきたいと思いました。

福音のためにも戦う教会となっていくには、クリスチャン個人の成長だけではなく、教会を構成する一人一人が強く結び付けられ、教会全体が整えられ、主に向かって歩み続ける必要があると語られました。

今回のカンファレンスでは昨年のカンファレンスに続き、多くの恵みに与りました。この恵みを主にあって感謝します。私は、日々献身し続けること



も示されました。毎日毎日、生きていくなかで試練や誘惑、摩擦がありますが、それをも主に全て委ね、福音を着る者として歩んでいきたいです。主の福音が全世界に満ち溢れますように。そして、私たちが日々用いられている恵みを感じます。



て、引退された先生方の住宅、生活の支援の検討をしていく必要があるのではないのでしょうか。これからのフェローシップの宣教の前進のためにも、各個教会だけでは成しえない先生方への新しい支援体制作りを祈り、その青写真を描いていけたらと願っています。フェローシップの諸教会を通して、主の御名がさらに崇められることを切に祈りつつ。

伝道者の介護問題について(2)

港北ニュータウン聖書バプテスト教会 協力牧師
NPO五つのパン、ヘルパーステーション
ビス提供責任者 鹿毛 独歩



前回、伝道者の親の介護について、共に考えさせていただきました。今回は、伝道者自身の介護への備えについて考えていきたいと思います。

伝道者夫婦も長年の伝道の働きと共に、親の介護が終わり、やがて伝道者自らの老いについて考える時代となります。教会が経済的に豊かであれば、引退牧師の生活を最後まで支えることができるでしょう。また伝道者の子どもたちが信仰を持って、主と教会に仕えていけば、共に折り、親の介護についても共に考えることができるでしょう。しかし、子どもたちが信仰から離れていけば、負担をかけることに躊躇することになります。そのため、「教



会の後継者を」と考えながらも、牧師の働きを継承していくことができない状況が生じてくるのです。

① 伝道者の孤立化

伝道者の個人的な課題については、伝道者同士、分かち合い、折り合う交わりは皆無と言ってもよいでしょう。これまでも国内宣教カンファレンスなど学びと交わりの機会はわずかながらありましたが、それでも個人的な問題については、なかなか相談できなかつたのではないのでしょうか。私たち伝道者も高齢化し、自らの立ち位置、自らの歩みについて考えておかなければならなくなりそうです。伝道者の老後については、教会が責任を持って支えていくべきだという考えもありますが、経済的に豊かな教会でないかぎり、後継者を招聘するだけで、教会経済はいっぱいいっぱいなのです。また後継者がいない無牧の教会さえも増えている現状すらあるのです。

② 教会の孤立化

各個教会の独立性を重んじるバプテスト教会は、互いに支援し合うことが少なくなっています。教会によっては先生方がアルバイトをしながら、教会の経済を支え、伝道の働きの全てを担っておられるところもあるでしょう。またキリスト教の異端の問題が社会問題として取り沙汰されるなかで、誤解や偏見に苦しんでおられるところもあると思います。若者はバーチャル世代で、なかなか教会に足を運ぶこともなく、YouTubeを使つての伝道、バーチャル教会など、高齢の牧師が今の時代についていけない状況もあります。諸教会がその独立性を保ちながらも、助け合い、支え合い、主の福音宣教に努めていく必要があるのではないのでしょうか。

③ 新しい体制

フェローシップも高齢の先生方の支援について考えるべき時が来ているように思います。高齢になったら、行政のお世話になるというのではなく、先生方の主にある労に報いる支援体制を検討していく必要があります。終末の時代の教会として、さらなる伝道の発展のために、祈りを合わせ、力を合わせ、フェローシップの共同事業とし



イエス・キリストの恩寵の中で

牧師は「日曜日に教会に行くことは主人に話してある」と言っておられましたが、言葉と暴力による迫害を受けることが度々ありました。仕事中に失敗をしても、ほとんど何も言われません。しかし、私が礼拝に行こうとすると主人はいつも苦い顔をするのです。「クリスチャンは勝手者だ。店が忙しなくなる時間になっても教会に行きやがる」。毎週のように嫌味な言葉を浴びせられました。「Ｙ！兎の頬っぺた殴ってやれ。そうしたら左側を向けよるぞ」。Ｙは私よりも後の雇われ人でしたが、申し訳なさそうな顔をして、私の右の頬を叩きました。

ある日、教会から帰つてくると、夫人がいきなり私の手から聖書を掴みとり、下駄で踏みつけ、かまどの火の中に投げ込みました。私は急いでかまどに手をつつ込み、燃えかけている聖書を取り出し、火の粉を払いました。痛々しい焦げ跡がつかまりました。しかし、主はみ言葉で支えてくださいました。「恐れないで、語り続けなさい。黙っていてはいけない。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない」（使徒の働き一八章九節）。

私はこれまで、毎朝7時に起きてい

ましたが、日曜は1時間早く、朝6時に起きることにしました。皆が寝ている間に掃除や鉢集め、下ごしらえなどを終えておくことにしたのです。すると、しばらくは何も言われなくなりました。ところが今度は「クリスチャンは勝手者だ。日曜日だけ早く起きやがる」と言われるようになりました。その時から、私は毎朝6時に起きて仕事をするようにになりました。仕事が終わるのは早くても午前1時です。それから交代で風呂に入り、裏の畑でデボーションをすると床に就くのは午前2時になってしまいます。いつも睡眠不足でしたが、次第に慣れていきました。

「信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです」（ヤコブ書二章一七節）。この習慣は今日まで続いています。体が覚えているのです。

神学校に入る日が近づいて来ましたが、仕事ができるようになった私を主人は辞めさせたくありません。あの手この手で引き留めようとするのです。「今日も教会に行くのか。今日はどうしても休め！」。強引に礼拝を休めさせられたことがあります。「兎はん。どうしても神学校に行くのか。心臓の弱い、死にかかっているワシを置いていくのか。クリスチャンはそんなに冷

たいのか。薄情な奴や。お前を拾ってやったのに！」。私は心のなかで反論しました。「今度は光の使いを装うてきましたか。頼んで、ここに来たわけじゃない！」。

ある日、主人は「神学校に行くんだつたら、今日から仕事はさせない。飯は食わしてやる。給与も払ってやる」と言いました。仕事をさせてもらえない屈辱感。これほどつらいことはありません。教会に行っても、心はうつろでした。この時、サタンが働いて、私の献身の思いを挫こうとしたのだと思います。四方八方から責められても窮しない信仰を祈り求めました。

初夏のある朝、主人がご機嫌顔で声をかけてきました。「兎はん。どうしても神学校に行かほんのか。あんたの母親が神学校に行くことを許せば、店を辞めさせたい」。私は言葉を失いました。すでに書いたとおり、私は信仰のゆえに母から勘当されていたからです。母は私が神学校に行くことを大反対していました。「王手飛車、万事休す。この戦いは負けや」。ところが、その日の午後、母から速達が届きました。5年ぶりの手紙です。一体何ごとかと恐る恐る、封を切りました。「元気で過ごしていますか。母も元気です。今、和倉温泉に来ています。思うことがあってこの手紙を書いています。あなたが神学校に行くのだったら母は反対しません。後ろを向いてはいけません」。主のなさることは、何と

みを持つ兄弟の家で「家の教会」のような礼拝を守っていました。そんなある日、牧師の近松三郎先生が突然教会を辞任。自宅で開拓伝道を始められると聞きました。その理由は私と同じでした。「主の御旨ならば開拓伝道に参加を」と願い、志のある5名での開拓伝道が始まりました。「あなたは私について来なさい」との主のみ言葉が心に響きました。牧師は早速、電車通りで街頭伝道を始められたので、私も着いていきました。小さい群れでしたが聖霊に満たされ、イエス様の福音を宣べ伝えました。太鼓をたたいて、賛美しながら日曜学校の案内をして回りま

した。暗黙のうちに主の日と水曜日は教会で奉仕するようになっていました。前掲において、「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。されど人の子は枕する所なし」のみ言葉を主が与えてくださった、という証しを記しましたが、その時、与えられた農村伝道の幻を伝道所が受け入れてくださいました。自活伝道になるので、経済のために簡単な農機具の製作と修理の技術を身に付けました。伝道所から遣わされて、京都府下北部の山岳地に散在する農家を訪ね、福音を証しました。「兄さん本当にクリスチャン？」と言われることもありました。田の畔に立って讚美歌を歌うと、「ああ、ほんまもんや」と認められて、おにぎりをいただきます

ました。農家の軒先を借りて、農機具の



農村伝道で訪れた美山知井村

静にしていました。牧師が「兄弟、いつまで休んでいるのですか。床を取り上げ、立って歩きなさい。早く農村伝道に行きなさい」と言われました。私は痛む右膝をかばいながら、近くの農家を訪ねました。そのうちに痛みが和らぎ、右膝も少しずつ曲げることができるようになりました（完治するまでに6年ほどかかりました）。

その頃、伝道所はJBBFの交わりに参加するようになりました。5名がラバン・ラージャス宣教師より、京都市内を流れる桂川で浸礼を受け、静岡バイブルバプテスト教会の伝道所として京都聖書バプテスト教会が再組織されたのです。こうして主は神学校に入學するまでの3年間、私を農村伝道に遣わし、霊と心と体をも鍛えてくださったのです。さらに神学校入学直前、主は吉田欣子姉と出合わせてくださり、婚約へ導いてくださいました。



ラージャス宣教師によるバプテスマ（京都の桂川にて）